



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容
Author(s)	吉岡, 亜希子
Citation	社会教育研究, 24, 11-23
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28563
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P11-23.pdf



父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容

吉 岡 亜希子*

1. はじめに

子育てという家族の営みの中で、母親に加えもう一人の貴重な担い手である「父親」が本稿の対象である。男女共同参画社会が現代的課題であり、子育てに関しても性別にとらわれることなく、喜びも責任も分かち合うという認識は浸透しつつあるだろう。しかし、現実には、性別による役割分業が著しい。子どもの育ちという点においても、母親一人の孤独な育児の弊害は大きな社会問題としてその深刻さを増している。母親の抱える育児期特有のストレスと「父親の育児意識」は強い相関関係があることも指摘されている¹。

父親自身の子育てに関する要望をみても、希望と現実の差は大きい。厚生労働省の調査(2003年)²によると、未就学児のいる家庭の父親のうち「仕事と家事育児を同等に重視」したいと希望している人は51.6%となっている。だが、こういった希望とは裏腹に、実生活で実現できている父親は25.9%に過ぎない。また、「どちらかといえば家事・育児を優先したい」という希望をもつ父親は15.9%いるが、実際に実現できていると感じている父親は、7.3%にとどまっている。さらに、子どもが生まれて、労働時間を減らしたいという希望をもつ父親は約3割いるものの、実現させることができたのは6.5%となっている。このように「子育てに十分時間をかけられない」「休みが取りにくい、残業が多い」など、職場の無理解や制度・慣例にしばられ、子育てや家族との時間、地域との関わりを持てない父親の実態が浮かびあがっている。人間として自然な営みであり、また、生活者としての「力」を身につける貴重な機会でもある子育てに父親たちが関われない状況は、決して放置されたままであってはならない。

今日の日本社会にとって、母親はもちろん、父親の子育て環境を整えることは急務である。中でも、父親の子育て意識の向上が重要課題であると考えられる。2003年、少子化2法案(次世代育成支援対策基本法、少子化社会対策基本法)が成立した。これまで主流だった仕事と子育ての両立を目指す母親への支援から、父親の働き方を含めた子育て環境の見直しにも重点がおかれた内容になっている。しかし、父親を個人でとらえた場合、育児休業制度があろうとも、少子化関連法案が成立しようとも、どれほどの人が仕事の時間を子育ての時間へと振り向けるであろうか。父親の育児休業

¹ 牧野カツ子「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要3』小平記念会、1982年

² UJF総合研究所「子育て支援策等に関する調査研究報告書」厚生労働省雇用均等・児童家庭局委託事業、2003年3月

取得率をみても、2004年度で、わずか0.56%でしかない³。子育て環境の整備には、法律や政策を充実させる点と同時に父親が子育てを我がこととしてとらえ、意識を変革するための契機となる経験や学びの場が必要なのではないだろうか。

そこで、少数ではあるもの、全国各地に存在する子育てに積極的に関わっている父親の子育てグループに注目した。「おやじの会」といった名称で、活動している父親たちはこれまでにない父親像を提示している。本稿で取り上げる父親グループのメンバーたちは、長時間労働や日本社会に根強い意識面での制約の中にあっても、子育てを我がこととして、主体的に活動を継続している。なぜ、彼らは子育てを自らのこととして関わっていくことができたのであろうか。現代社会の父親たちが抱える困難、矛盾をどうとらえ、乗り越えることができたのかを、父親の子育てグループから読み取ることが本稿の課題である。(なお、本稿では特に、母親の育児期特有のストレスが強い乳幼児期に注目しこの年齢に該当する子を持つ父親の子育てグループを対象とした)

2. 課題と方法

札幌市内においていわゆる「おやじの会」といった名称のグループ活動は、保育所、幼稚園、学童保育、子ども会、小中学校の保護者など、さまざまな子どもの年齢段階で展開している。だが、活動総数は少なく、保育所で数ヶ所、幼稚園では1園のみが正式に活動している。小中学校でも57校のうち継続して活動しているグループは、半数に満たないとPTA協議会ではみている(2003年現在)。

グループによって多様な活動を繰り広げているが、特にその内容に注目すると、大きく二つに分類することができる。まず、親子行事や父親同士の交流を中心としたグループ、学校や園の運営、教育方針、施設の維持管理をサポートする活動と家族交流を中心とするグループにわけることができる。本稿では、前者を「親睦型」、後者を「協同型」として分類する。「親睦型」は、父親と子どもの交流、父親同士の交流をメインに行事中心の活動内容のグループと定義する。「協同型」は、子どもや父親同士の交流に加え、子どもが育つ環境整備や施設運営にも関わり、職員らと共に働き、支える活動にも重点をおくグループとする。

以上の分類のうえで、父親自らが主体的に子育てに関わるための学習過程、条件を明らかにするという筆者の問題意識を踏まえ、幼稚園の中で最も積極的に行事を行い、また父親グループの歴史の長さや活発な活動実績からH幼稚園「おやじクラブ」を取り上げ、「親睦型」の事例として分析する。また、共同保育からスタートし、厳しい保育環境の改善や保育のあり方を園と親とが共に考えるという長い歴史をもつY保育園「おやじの会」を「協同型」の事例として抽出し、その実践展開、

³ 厚生労働省「女性雇用管理調査」(5人以上雇用する企業1万社を調査)。同年の女性の育児休業取得率は70.6%となっている。

学習過程、意識変容の分析を試みる。

調査は、H幼稚園「おやじクラブ」の活動に参加している、あるいは過去に参加していた父親19名とY保育園「おやじの会」の活動に参加している、あるいは参加していた父親8名を中心に各園の園長、元園長、母親からも聞き取り調査を行った⁴。聞き取り調査とあわせ機関誌等のデータも用い分析した⁵。

3. 父親グループの展開過程

3-1 「親睦型」, 「協同型」の実践展開

◇「親睦型」H幼稚園「おやじクラブ」

園児数は約360名、その内、「おやじクラブ」に入会している父親は、45名（2003年3月現在）である。地域的な条件もあり父親の年齢層は高い。また園の教育費が比較的高額ということもあり、安定した職業・収入である父親が多く、母親の多くは専業主婦である。

本項では、親睦型「おやじクラブ」の展開過程を、その内容から「草創期」（1991～1993）、「模索期」（1994～1996）、「発展期」（1997～2002）、「転換期」（2003～）と4つに時期区分した。

「草創期」～設立のきっかけは、1991年、当時の園長であったS氏が「家族の絆こそ子育ての要」という信念もと、その絆づくりに父親の力を期待したことから始まった。園長は園での教育に加え、幼稚園の全国組織などの役員を長く務め、日本の教育そのものを見通す視点が求められる立場にあった。こうした経験が、子育て問題と社会構造、企業戦士にならざるをえない父親の問題や、母親の育児困難などが及ぼす影響、そしてその影響をだれよりも子どもが受けてしまうという大きな問題を意識する契機となったという。

当時の園長の呼びかけに集まった11名は、父親同士の交流、父子交流、園長や職員との交流をはじめ、年に一度文化講演会を開催して、子育てと父親についての学習にも取り組んだ。

発足当初は、母親中心の父母会に対抗して、父親独自の路線を打ち出そうという方向だったが、園長・教員・父親・母親の座談会や講演会、日常の教員、母親との交流などで、父親だけでなく、母親とも園とも協力しながら子育てしていくことの必要性を感じるようになり、いつしか父母会の母親たちと「おやじのクラブ」の父親たちは“車の両輪”として、園をバックアップしていこうという認識になっていった。

「模索期」～発足以来マネージャーとして会を支えてきた職員のSUさんが退職し停滞気味となる。会員は増加していたが、行事運営を担当する父親は少なく、特定の会員に負担が集中した。

⁴ 聞き取り調査は、主に2003年に行った。

⁵ H幼稚園「おやじの会」では、毎年1回「機関紙おやじ」を発行している。

だが、模索期の最後の年にHPを開設。当時はまだHPの数が少ない上、父親の子育てグループ活動報告という希少性からマスコミに注目され、数社から取材を受けることになる。育児相談メールも寄せられ、担当した父親は、教員をはじめとした専門家に問い合わせ返答した。また、HPで独自のアンケート調査を行い、その結果を幹事会の度に集まった会員に報告した。海外に住む日本人の父親からも育児相談が寄せられた。こういったHP効果により会員の士気は高まっていった。そして「模索期」最後の年である1996年には、初の父子一泊キャンプが開催される。この頃から、設立当初、重点がおかれていた“父親と子育ての学習”をあまり前面に出すのではなく、“父親も子どもも楽しめる活動”がクラブの方向性として意識されるようになっていった。

「発展期」～それまで代表をはじめとする数名が担当していた行事の企画・運営をすべて「担当幹事制」に切り替える大転換を行った。担当幹事制の導入により、一部の父親が担っていた負担が分散し、なおかつ、行事を企画・運営する面白さを多くの父親が体験するきっかけとなった。こうして組織としての基盤も整えられていった。また、会員の父親が呼びかけ、教職員と合同でジェンダー問題を考える学習会を開催するなどイベントだけではなく、一般的な知識獲得の学習活動も平行して行ったが、中心に据えられるものではなかった。

「転換期」～発足12年を迎え、会員数に大きな変動はないもの、活動の担い手不足など組織の活力低下が深刻化している。また、常に飲酒を伴う打ち合わせや行事に対して一定の規制を設けることとなったが、そのことで活動に距離を置く父親への対応も課題となっている。

「おやじの会の」の年間行事は、春の学年別懇談会（教員を交え学年ごとに父子の交流を行い新入会員勧誘の機会としている）からはじまり、定期総会、田植え体験、父親たちがおでんや綿飴を販売する七夕フェスタ（アトラクションとして人気キャラクターに扮した父親の仮装パフォーマンスが行われる）、父と子のキャンプ、ゲーム大会・おやじフェスタ、忘年会、餅つき大会、スキーツアー、教員と父親の懇親の場であるジョイントパーティーなどが行われている。この他同好会活動として、釣りやドッチボール大会出場、マラソン大会出場など、園とは別のフィールドでも自由な活動を繰り広げている。

◇「協同型」父親グループY保育園「おやじの会」

定員110名。1968年共同保育所として開所、1973年新園舎完成と共に認可保育所となる。開所以来、理想の保育を目指し、保育者、父母ともに努力を続けているが、認可以後も財政状況が厳しいのは他園と同様である。入園した父親は、全員が自動的に「おやじの会」の会員となる。ただし、参加は自由で、中心となる父親は、例年数名～10数名である。メンバーの傾向としては、大学が近くにあるため、大学教職員が一定数参加している場合が多い。

協同型「おやじの会」もその内容から「設立前」（1968～）、「草創期」（1988）、「発展期」（1990年

代)、「転換期」(2003～)と時期区分した。

「設立前」～設立には、園の歴史と園長(当時)の保育に対する考え方が深く関わっている。1968年に開設した当時は、全国的にも実践例の少ない産休明け保育に取り組みスタートを切った。その後、認可保育園に向けての運動がはじまる。保育士らと連動して、父母も認可を求める署名運動に奔走した。このころはまだ母親が運動の中心だったが、頻繁に行われる園と父母会の話し合いを通じて、次第に父親も子育てを巡る問題を身近なこととしてとらえるようになっていった。

1980年代に入り、それまで保育園にあまり姿を見せなかった父親達が次第に送迎を担当するようになった。さらに、子育てを「母親だけにやらせるのはずるい、もっと子どもとかかわりたい」と考える父親Zさんが入園、園長の思いとつながり、その後、父親の子育て意識が少しずつ変化していくきっかけとなる。

この間、園長は、父親の子育ての重要性について折をみて(例えば父母の学習会や父母との連絡帳など)、さりげなく伝えていた。決して、こぶしを振り上げて訴えてきたわけではないが、父親たちに静かに、その思いが伝わっていったといえるだろう。

父親Zさんは、歴代、母親が会長を務めていた父母会の初代男性会長に就く。その中で、父親懇談会を企画したり、父親と子どもが遊ぶ場として日本の伝統遊びを楽しむ企画を実行している。父親懇談会では、他の父親の家庭での生活、子どもとのかかわりがざっくばらんに話された。最初の頃は、参加者が少なかった父親懇談会も、子育てに興味がある父親同士ということで話が弾み、次第に参加者が増えていった。

こういった流れを受け、1988年に正式に「おやじの会」が発足した。

「草創期」～発足当時を知る父親SAさんは、「母親とは違う側面を打ち出そう」、「父親同士の交流もしたい」、「保育園のために何か役に立ちたい」といった父親たちの思いがあったと語る。

「発展期」～父親の子育てグループは、まだ全国的にも珍しかったため、マスコミや保育関係者の注目を集めた。父親たちは新聞のインタビューや札幌市内のフリーペーパーに何度も登場することになる。また、この取材が縁となり、フリーペーパーのコラムを担当したり、保健所の子育て講座で、講師の依頼を受けるなど活動の場が広がっていった。

「転換期」～90年代は活発に活動してきたが、2003年、中心となって活躍してきたメンバー数名が卒園となる。中心メンバーが卒園後、積極的に参加する父親が増えず、活動が停滞気味となる。また、ひとり親世帯の増加などにより、「おやじの会」という名称に違和感をもつ親もいる。会としては今後、解決していかなければならない課題として意識し、キャンプの名称をこれまで使っていた父親という言葉避け、ファミリーキャンプという名称に切り替えた。

年間行事としては、歓迎会(交流会)、ソフトボール大会(園内の親睦を目的に子ども、保育士、父母、OBによりチームを結成。ゲーム終了後は、バーベキューで交流するのが恒例)、夏祭り(ビー

ルパーティー), サマーキャンプ, バザー, あつかんパーティー(父親が得意料理を子と妻, 職員に振舞う日)が行われている。

また, 父親同士の交流活動として, サッカーやフットサルの同好会もある。年に2~3回, 父親同士の飲み会もある。キャンプや同好会以外の行事は, 母親や子どもを含めた家族全員で楽しむ場となっているのが特徴だ。この他に, 簡易プールの設置・撤収, 園庭の改修や雑草刈り, 園舎の補修なども行っている。

これらの活動とは別に, 保育合研などに保育者や母親だけでなく, 父親が参加することもあり, 他園での取り組みや, 保育の課題などを学ぶ機会がある。父母会などでも親の学習会が定期的に開かれている。

4. 学習過程と意識変容

次に, 子育てグループに関わった父親たちの子育て観や子育て行動の変化とその契機を考察する。父親たちは, どのような学びの中で子育て意識・行動を変容させていくのであろうか。子育てグループ活動に関わることで, それ自体, 父親の子育て行動にとっては大きな契機ともいえるが, 積極的・主体的に関わる父親がそこへいたるまでの過程を明らかにすることで, 「親睦型」「協同型」に共通の契機を見出したい。方法としてまず実践内容に焦点をあて, どういった活動が父親の意識・行動に影響を及ぼすのかをみていく。

4-1 意識変容の契機となった実践

聞き取り調査と資料から, 父親の子育て意識変化の契機と関係が深いと考えられる実践として次の6点を抽出した。まず第1に「仮装パフォーマンス」, 第2に「料理を振舞う経験」, 第3に「宿泊行事」, 第4に「飲食を伴う交流」, 第5に「幼稚園教諭・保育士と父親の交流」, 第6に「グループ外への発信」である。以下, この6つの要素と意識変容について考察する。

a) 仮装パフォーマンス (この項目のみ協同型「おやじの会」に該当する活動はない)

親睦型「おやじクラブ」の場合, 父親が活動に意欲的になるもっとも大きなきっかけ作りの役割を果たしてきた行事が「七夕フェスタ」の仮装パフォーマンスである。この行事では, 父親数名が毎年仮装してステージでパフォーマンスを繰り広げる。「おやじクラブ」が年に一回発行している機関誌からも, 仮装に挑戦した父親たちの意識変化が見て取れる。

◇1996年機関誌「おやじ」第5号より

「私の子どもは内気で, 幼稚園で自分を表現できず, おもしろくないから行きたくないという時がありました。そんなとき, 七夕フェスタのアトラクションで, バイキンマンの役をやり, これがきっかけで, 「おれのお父さんはバイキンマンをやったんだぞ!!」と他の子どもに言ったら, 皆から「すげーなーお前の父さん」と言われ, 自信を

つけました。それから幼稚園は楽しいから、日曜日も行きたいと言われ、うれしさがこみあげてきました」

第5期（平成7年度）の代表に就任

◇1997年機関誌「おやじ」第6号より

「七夕フェスタでジュレンジャーやガラガラヘビを踊った貴重な体験。その時の子どものびっくりした顔は、嬉しい思い出です」

第6期（平成8年度）の代表に就任

◇1999年機関誌「おやじ」第8号より

「私が入会したきっかけは、会社の取引先の方が偶然おやじクラブに入会しており「いも虫役が足りないので協力してほしい」とのお話があり、断りきれずに参加したのが全ての始まりでした。長女が「パパいも虫やったんだよね。うれしかった。」という一言が今も心に残っています。まさか幼稚園の行事にいも虫で参加するとは思っていませんでしたが、その時が何となく楽しかったのを覚えています」

第8期（平成8年度）の代表に就任

以上のように父親たちにとって「仮装パフォーマンス」は、“子どもに喜ばれること”による自分自身の喜びを実感できる場となっている。また、「自らも気づかぬ一面」、「能力」を発見する場でもあり、企業社会で重視される効率とはまったく無縁の行為にも価値があることを身をもって実感する場でもある。仮装パフォーマンスを経験した父親は、後に会の活動に積極的になり、最終的に代表に就任するというケースが多いのもそのためであろう。

b) 料理を振舞う経験

親睦型「おやじの会」の「七夕フェスタ」では、おでんや綿飴を販売して、その収益金の一部を園の花火大会への協賛として寄付している。また「スノーフェスタ」では豚汁を作り、収益金は餅つき大会などに使われている。いずれも材料の仕入れから仕込み、販売、後片付けまですべて父親たちの手によって行われている。機関誌「おやじ」では、父親の喜びや生き生きとした姿が記されている。

「七夕フェスタでの綿あめ作りで、子どもたちがとぎれる事のないつらさが最高の思い出です」、「七夕フェスタおやじの店、綿あめ体験コーナー 子どもたちの喜ぶ顔を見たら苦労もふっとぶ」、「七夕フェスタではおでん作り、スノーフェスタではぶた汁作りに参加している姿を見て、子ども達は『パパ、お料理の達人だ』と尊敬、野菜嫌いの息子もブタ汁だけは食べるようになりました（スゴイ）。～母親の感想より」、「今年で5回目の参加となる。1回目の時は現園児の子どもが生まれたばかりで、手伝う余裕もなかったが、2年目3年目は息子を背負って綿あめを作った記憶がある。みそおでんの仕込みも綿あめ作りも慣れたものである。まかない用に大根買ってきて煮ようか……なんぞという余裕すらある」

一方の協同型「おやじの会」では、1996年から「あつかんパーティー」が開かれている。当日は、父親たちが買い物をして、各々自慢の料理をつくる。子どもや母親、職員もその料理を楽しむ。料理上手な父親は、料理に不慣れな父親へ、料理の手ほどきを行う。子ども達も父親に混じって手伝いをする。あつかんパーティーの収益は、簡易プールや園庭修理の資金として提供している。また餅つき大会用の杵と臼やたい焼き器を購入したり、園児が自由に借りることができる貸し出し文庫開設のための絵本購入資金として寄付もされている。

父親達は料理を振舞った経験を「純粹に喜んでもらえることがうれしい。あまり、面と向かって家族や他の人から感謝されたり、感謝の言葉をかけられる機会はないので、張り切りました」と振り返る。

c) 宿泊行事

親睦型「おやじクラブ」の場合、宿泊を伴う行事として「ネイチャースクール」や「スキーツアー」などがある。基本的には父親と子どもだけの宿泊行事で、母親のいない空間で過ごす父子の時間となっている。

宿泊行事に参加した子どもの声（機関誌「おやじ」より）や父親の声を以下に紹介する。

「ネイチャースクール」に参加した父親の感想 ～聞き取りより～

「子どもと2人、キャンプなどで外出すれば、母親もフリーな時間ができ、そういう機会をつくってあげられるというところの意味合いはあると感じています。父親にとっては、子どもと一緒に遊べる時間をつくることになり、双方にメリットがありますね」

「朝、起きたとき、子どもに何をしたいのかかわからないお父さんもいます。でも、隣で手際よく子供の身支度をしているお父さんがいると、見よう見まねでちゃんとできるようになるんです」

「上の子どもが幼稚園だと、下の子はまだオムツが取れていない場合もありますが、そんな小さな子どもと一緒に連れて参加する父親もいます。勇気があるなと思いますが。小さい子の中には、夜通し泣いている子もいて、大変そうですが、なんとかやっていました」

「夜遅くに焼き鳥やエビ、貝なんかを焼きながら酒を飲んで、たわいのない話をできるのがいいですね。この時間を共有すると本当に仲良くなれて、釧路や東京に転動した父親も、わざわざキャンプのためだけに札幌に来たりするんですよ」

協同型「おやじの会」でも同様の感想が語られている。～聞き取りより～

「キャンプなどによって自分の子だけでなく、他の子の面倒もまとめて見ることができるようになりました。また私が自分の子どもをみていなくても他の父親が必ず見ていてくれますから、安心して任せられます」

「キャンプに行ったり交流すると父親同士『仲間』だという意識が生まれます。父親の仲がよいと子どもも仲よくなりいい方向に進みます。信頼関係が生まれるとよその子も叱れるようになりました」

「一年に一度ぐらい母親が育児から解放される時間をつくろうという発想ではじめたんですが、自分自身にとっても、子どもにとっても貴重な経験になりました」

宿泊行事の目的として母親の子育て負担の軽減は当初から意識されている。子育て力量という点では、他の子どもの面倒を見られるようになったり、他の子を叱れるようになるための、親同士の仲間意識、信頼関係の構築に宿泊行事は貢献しているといえるだろう。また一晩子どもと過ごす

いう体験は、他の父親を見本として、子どもと接する技術や遊び方を学び、また我が子だけでなく、他の子どもと遊ぶことの楽しさを知る機会や子育ての大変さを知る機会となっている。子どもにとっても現代社会では難しい異年齢集団での遊びを経験する機会になっている。

d) 飲食を伴う交流

親睦型「おやじクラブ」では、打ち合わせや親睦を目的に頻繁に飲食を伴う交流を行っている。「自分の子より、少し年齢が上の子のお父さんのアドバイスはためになります。何歳になるとこうなって、父親もこういうふうに接すればいいのかなと、なんとなく子育ての手本になるところがいいですね」

「会社では子どもの話はできませんが、おやじクラブなら思いっきり親ばかになって子どもの話ができる、それがいいですね。子どものことだけで何時間も話ができるんですよ」

「幹事会にできるようになって子育て意識が変わっていったと思います。子ども達の情報ももらえるし、子どもへの対処の仕方もそれぞれ違うので、その点を聞けるのもよかったです。私自身のストレス解消にもなりますし、異業種交流になる点もいいですね」

「お酒を飲みながらの議論の場が子育ての意識を変化させる契機でした。利害関係のない父親たちが子ども達にどう関わっていくかということを話合うところがいい」

協同型「おやじの会」では、年に1～2回いわゆる「飲み会」が開かれている。共働き家庭のため、「親睦型」のように頻繁に飲み会を開いてはいない。Y保育園の場合、飲食を伴う交流は、例えば園庭の補修、プールの撤収などの作業後、家族全員参加でバーベキューをするという形式が多い。H幼稚園は父親同士の交流が多いが、Y保育園のおやじの会は家族交流がメインとなっている。

「家族交流をすると、よその家庭の子育てを知る機会になり参考になりますし、親が仲良くとすると、子どももすぐに仲良くなります」

「お父さん同士もそうですが、お母さんも家族交流をすると変わります。母親一人でもがんばらなくていいんだ——という風に」

共通している点は、飲食を伴う交流は、父親達が親密な関係を築くための最も効果的な場となっていることである。聞き取り調査を行った父親たちは、肩書きを気にしない関係、業種の違う人との交流に意義を見出していた。「子ども」というつながりだけの付き合いは、建前でない本音の付き合いを容易にし、仕事のストレス発散の場としても機能していた。これは、現代社会では子育てというプライベートな事を心置きなく話せる場は父親にはほとんどないことを示しているといえるだろう。そして、何よりもそれまで手探りだった父親の子育てがモデルとなる先輩父親との交流によって、自己の子育てへの確信につながっている点を見出すことができる。また、母親にとっても意識変容の場として機能している。

e) 園の教員と父親の交流

親睦型「おやじクラブ」の父親は「園に頻繁に行くようになり、先生たちのがんばり、子どもた

ちを思う気持ちを知りました。それで自分も協力したいと思うようになりました」,「活動を通じて、先生たちの顔と名前が一致するようになり、妻との共通の会話が増えました」,「若々しい先生たちと交流することが純粹に楽しいですね」と語る。

また、協同型の「おやじの会」の父親たちも「先生たちとは、活動を通して日常的に関わりがありますから、子どものことや普通の会話もしやすく、身近な存在という感じです」,「一緒に対市交渉をしたりするのは大変ですが、子どもの問題を知る機会になっています」,「先生に声を掛けてもらって、一緒に保育合研に出席しました。他のマチのおやじの会の活動に随分刺激を受けて帰ってきました」と、教員との交流の意義を強調する。日頃、行事などで教員と交流し、互いに顔や名前が一致する関係を築いている父親たちにとって、教員との交流は、子育て意識の変容の契機となっているといえるだろう。

f) 外部への発信

HPの開設、マスコミからの取材、コラムの執筆、子育て講師としての活動など、外部への発信は、「親睦型」「協同型」共に、子育て意識・力量形成という面での高まりはもちろん、グループ活動継続という点でも重要な要素となっている。

<意識変容の契機となった実践における5要素>

これらの実践内容を踏まえ、父親グループ活動に欠かせない要素として以下の5項目に注目した。

(図1)

①時間の共有と②非日常から生まれる→③解放, ④(親密な)他者からの評価による→⑤達成感

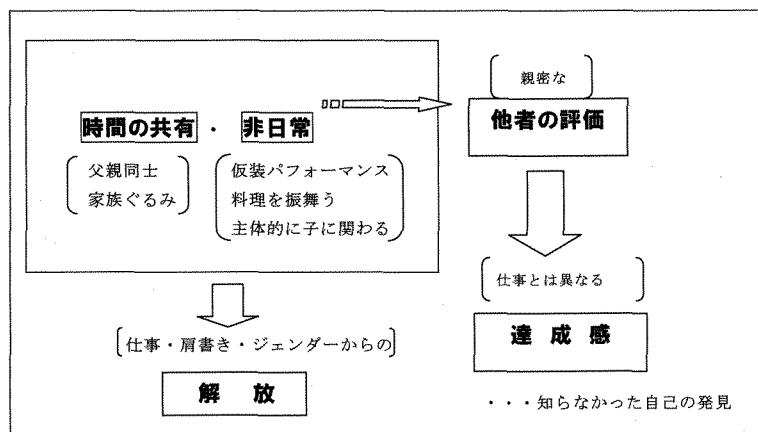


図1 「親睦型」「協同型」 共通の5要素

この5つの要素を例えば「宿泊行事」でみるならば、まず仕事と家庭という2つの空間で生活していた父親が、キャンプという「非日常」の空間で、日常的には母親がメーンとなって関わっている子どもに対して、母親へのサポートという立場ではない第1次責任者として対応するとい「非日常」を経験する。そして、「時間の共有」によって、父親同士の信頼関係と子どもとのより親密な関係を築くこととなる。さらに、子育ての責任者として関わる事の苦勞を知る。また、ここでは、先輩父親、父親仲間から、いわゆる見よう見まねの学びがある。これらの「時間の共有」によって生まれた父親同士、父と子の信頼感や親密感は、父親にとって居心地のよい空間となり、仕事や肩書き、ジェンダーといったものからの「解放」を生む。仕事場で求められるような効率とは別の次元の経験、新たな関係性の創造が実践の要となっている。また、子育てグループに積極的に関わることにより、仕事上で出会う他者とは違う、子ども、妻、園の職員、父親仲間という親密な他者を生み出す。そしてその親密な「他者の評価」は、父親の子育て力量の向上、子育て意識の向上の原動力となっている。

4-2 父親の意識変容

前項では、意識変容の契機となる実践について考察したが、次に「親睦型」、「協同型」別に父親の意識変容を見ていくと、それぞれ以下の共通項をあげることができる。

■親睦型の共通項～親睦型「おやじクラブ」の父親たちに共通する契機は、父親同士の交流による楽しさ、父親と子どもの時間を共有することの楽しさが、もっと子育てに関わっていこうという意識を生み出す点である。仕事とは別の空間・居場所を得、これまでの暮らしにはなかった解放感を味わった父親たちは、仕事中心であった暮らしを大きく変化させている。また一泊キャンプなどを通して、子育ての喜びと同時に子育ての大変さを知ること、妻が育児から解放される時間の必要性も感じ取っている点も確認できた。さらに、我が子に対するに保育者の精一杯の働きかけを実際に目にしたことが、「園の役に立ちたい」という思いに至り、行動へとむすびついていた。

この他、性別役割分業を肯定する父親たちをも巻き込んで実践が展開している点にも注目したい。「子育ては女の仕事」と語っていた父親であっても、解放される居場所をつくり、父親仲間や子どもと時間を共有する仕掛けをつくることによって、母親の仕事とと思っていた子育てに関わり、母親の仕事とと思っていた料理にも自然に取り組み、親としての力量を高めることにつながっていた。

■協同型の共通項～協同型「おやじの会」の父親たちに共通する意識変容の項目は、園との「協同」の関係であろう。協同型の場合、親睦型で確認できた項目に加え、園に関することを協同で行うことの意味を認識している。また、全ての父親ではないものの、我が子の子育て問題は、社会全体の問題であることを把握している点もあげられる。園とともに運営に関わり、父母会などの議論に参加することは、共働きという忙しい暮らしの中では、負担感も大きい、親として得られるものも大きいと父親たちは評価する。父親らの「親としても育ててもらった」という言葉や「行政へ

の働きかけは大変ですし、園の草むしりなんかも業者にお金を払ってやってもらえば済むことかもしれませんが、親も子も先生たちもみんなで協力してやるのがいいんです」という言葉は、協同型特有の意義を伝えている。また、父親だけの交流に加え、家族全員が参加して楽しむ時間が多い点も特色だ。父親も母親も子どもも交流もすることで、新たな家族ぐるみの付き合いが生まれている。さらに、家族交流は、子どもの送迎だけでは知りえない子育てや家事に対する考え方やそれぞれの方法を知る機会となり、自らの子育て・家事行動を振り返る契機となっている。

5. まとめ

子育てを我がこととして主体的に関わる父親を生み出すための、どのような特質が父親の子育てグループに存在しているのか。以下の7点を指摘できるものとする。

1. 子育てそのものの楽しさを実感することによる動機付け。いわゆる“楽しさ”がさらに子育てに関わっていかうという意識を生み出す。
2. 父親としての力を発揮できる場の設定。
3. 父親としての仲間づくり。仕事を離れたしがらみの無い新たな友人関係の構築。
4. 先輩父親との交流による見通しをもった子育て力量の獲得。不必要な不安の解消。
5. 身をもって体験し目にすることによる「妻の苦労」、「教員の努力」に対する気づき。共感的な理解から展開する主体的な子育て意識の芽生え。
6. 性別役割分業の自然な（あるいは無意識の内の）克服。
7. （特に協同型において）現代社会における子育て課題の意識化と課題の克服に向け自ら行動する力量の獲得。

現代社会の父親の多くは、「仕事」に非常に高いウェートを置いた暮らしを送っている。意識の面でも子育てや家事を行にくい社会であることは明らかであるが、子どもというつながりが生み出す新たな人間関係と親として活躍する場があれば、父親たちは予想をはるかに超える力を発揮する。父親たちはこれまでとは異なる新たな関係性や価値観を獲得することによって、仕事中心の生活を大きく変化させている。子育ての学びは机上のものだけではない。いわゆる体験による子育て学習の側面が父親グループの最も評価できる点ではないだろうか。さらに性別役割分業を肯定する父親をも巻き込んで実践が展開している点も重要である。日常、子育てや家事は女の仕事と考えている父親であっても、グループ活動に参加することで、子育ての経験を自然な形で積んでいる。

「親睦型」「協同型」に共通する父親グループの特質に加え、「協同型」おやじの会において、特に顕著な特質として、「子どもだけでなく、親も“育ち合っている”ことを実感している」点があげられる。保育者と父母とが一緒に園を支えていくという活動によって、父親たちはわが子の子育て課題が個人的な対応だけで解決するものではなく、社会全体の課題でもあることを認識していく。

さらに、一部ではあるものの現代的な子育て課題に対して、自ら行動する力量を獲得している様子もみてとれる。卒園後、学童保育において活躍する父親も少なくない。卒園した父親たちは、「子どものことは、仲間をつくらないといひものができないということをおやじの会で学んだので、学童保育でも心がけました」、「おやじの会や学童保育の活動を通して思うのは、人間は人間の中で育っていくということです」と語る。園での議論、課題を克服していく経験は、学童保育といった子育ての次のステージにおいても力を発揮する基礎となっている。「親睦型」おやじクラブにおいては、「協同型」ほど子育てを取り巻く社会的な課題をわがこととしてとらえる契機は少ないといえる。

父親の子育てグループは、現代社会が抱える子育て課題を見通した場合、どのような意味をもつであろうか。根強い企業文化、性別役割分業意識に対して、これまで多くの女性たちが問題を提起し活動してきた。だが、男性たちの意識変革は進んでいるとはいいがたい。“女性が学び、女性が変われば男性も変わる”という図式だけでは、社会全体の子育て意識の変革は難しいだろう。子育ての課題は、「子どもと母親の課題」ではない。父親を含めた社会全体の課題である。子育てという営みを母親だけで行うことは、大きな困難を伴う。困難の解決には、まず親である父親が子育てを我がこととして、とらえる社会にならなければならないだろう。父親が経験を通して主体的な子育て意識を形成することができれば、子育て困難な社会を変革する大きな一歩となるだろう。

参考文献

- E. ハミルトン『成人教育は社会を変える』玉川大学出版部、2003 年
 アトム共同保育所・汐見稔幸『ひとりじゃ子育ててきっこない』かもがわ出版、1998 年
 鈴木敏正『エンパワーメントの教育学』北樹出版、1999 年
 鈴木敏正『自己教育の論理 主体形成の時代に』筑波書房、1994 年
 鈴木敏正『地域をつくる学びへの道』北樹出版、2000 年
 鹿嶋敬『男の座標軸』岩波書店、1993 年
 渡邊洋子『生涯学習時代の成人教育』明石書店、2002 年
 プチタンファン編集部編『読んでくれてありがとう』婦人生活社、1996 年
 中村彰・中村正『男がみえてくる自分探しの 100 冊』かもがわ出版、1997 年
 小出まみ『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房、1999 年
 柏木恵子『子どもという価値』中公新書、2001 年
 柏木恵子『家族心理学』東京大学出版会、2003 年
 伊藤公雄『男らしさのゆくえ』新曜社、2000 年
 佐藤一子『生涯学習と社会参加 おとなが学ぶことの意味』東京大学出版会、2002 年
 佐藤一子『子どもが育つ地域社会』東京大学出版会、2002 年
 小木美代子・立柳聡・深作拓郎『子育て学へのアプローチ』エイデル出版、2000 年
 ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993 年